

「第 7 回 東京都病院学会 開催にあたって」

学会長 小泉 和雄

(医療法人社団医善会 いずみ記念病院 理事長)

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災は、日本における有史 1600 年来といわれる未曾有の自然災害でした。大津波の発生が加わったことから、これまで人間が築き上げてきた経験と知恵をいとも簡単に乗り越え、被害を甚大にしました。また、原発事故の発生により、原子力の安全神話も葬り去られました。さらに、被災地では、政府が発信する情報への不信から、放射能汚染に関する風評被害も発生し、復興への強い向かい風となっております。このようにさまざまなリスク、危機を表面化させた東日本大震災は、日常生活において「想定外」のことが起こり得ることを証明しました。そして、私たちは、いかに稀でも最悪の事態を引き起こしてしまうリスクに対し、対策と準備、訓練そして正確かつ新しい情報を収集する方法が求められているのだと痛感しました。こうした問題意識の下、平成 24 年 2 月 19 日、第 7 回東京都病院学会の主題は、不測の事態に直面したときの被害の最小化について考察を深めたいと考え、「**病院における危機管理**」としました。

これまでは医療機関のリスクは、とかくマスコミの注目度や報道内容、その頻度から医療事故や医療過誤に傾倒しがちでした。これらは重要なリスクであることに疑いの余地はありません。しかし、医療機関の存続を展望するとリスクはこれらにとどまりません。私たちは、前述の災害・風評リスク、苦情やトラブルに加えて、個人情報などの漏洩・職員の退職などの労務リスク、資金繰り悪化などの財務リスク、流通麻痺による欠品や環境汚染といった存続を危うくする無数ともいえる因子が潜在していることを認識する必要があります。経営を含め資源は有限であり、すべてのリスクをゼロにすることは不可能です。そのため、私たちはリスクを適切に評価し、事業への影響度を分析して、影響の大きいものから優先順位をつけて準備していかなければなりません。

本学会では、各医療機関が地域において存続していくために、どのようなリスクが潜在し、いかにそれらを管理するかなどについて、活発な議論が展開されることを期待しています。また、今回は学会における会場運営のスタイルを若干変更しました。メイン会場は、昭和大学 小口勝司 理事長による基調講演、学会長講演、シンポジウムの 3 題で使用します。シンポジウムでは座長のほか、数人のシンポジストにお願いし、1 題あたり約 90 分で「組織」「情報」「財務」の危機管理について討論して頂く予定です。また、委員会セッションにおいては、急性期医療委員会、診療情報管理委員会に加え、事務管理部会セッションを設定しました。演題発表は、一般演題およびポスター発表とし、募集演題カテゴリーは 13 部門を考えており、応募の機会を拡大しました。

東日本大震災を体験し、策定していたマニュアルや事業継続計画（BCP）はほとんど機能しなかったという声も多く聞かれました。危機に直面すると理論先行や形式重視では職員を含め組織が動かないことが露呈してしまいました。日頃からさまざまなリスクにさらされている私たち医療関係者にとって、大切なことは管理であり、今回の主題は関心の高いテーマであろうと考えた次第です。各医療機関においては、一人でも多くの方からの積極的な演題発表への応募を期待しております。そして、学会当日は多数の方がご参加下さいますよう、ご協力をお願い申し上げます。